

水によせて 安田百合絵

経塚朋子歌集『カミツレを摘め』を興味深く読んだ。陶芸に関わる仕事を生業とする作者の、美術に関する深い造詣と、日常を切り取るまなざしの鋭さが融け合い、繊細な味わいの魅力的な歌が紡ぎだされている。とりわけ、水にまつわる歌は印象に残った。

・テーブルを磨きあげニスをぬりかさぬ青葉うつせる水面となるまで

・まかがやく姫去りしのち竹は水ためて小さく空映しをり
 ・水をながめ水をわたりて水にうつる影描かざりき藍ふかくして
 テーブルが水面になるという幻視。かぐや姫が去ったあとに竹に残された水。描くことよって構築されなおす、水の色の深さ。こうした歌が水を扱うときの繊細な手つきには、絵画に深く親しんだ作者ならではの「巧まない巧みさ」とでもいったものを感じとることができよう。藤島秀憲氏による解説では、「作者像が明確に見えてくる歌集である」ということが強調されていたが、そのことに完全に同意したうえで、この歌集においてその作者像は、作者の生活のリアルな描写によるのと同じくらい、あるいはそれ以上に、むしろこうした独自のまなざし（観点）を開示し、そのまなざしに束の間読者を誘い込むことによっても示されている、といった添えておきたい。「私（性）を示す」ためには、自らの生活などを描き、三人称として示すのと同時に、「わたしに見えて

いるユニークな世界を示す」という、一人称的な方法もあるだろう。『カミツレを摘め』においては、その二つの方法がかなり意識的に混ぜ合わされ、作者像を強める効果を生んでいる。

水の歌でもうひとつ印象に残ったのは、(そのタイトルとは裏腹に)ほとんど水の歌集といってもよい、井上法子『永遠でないほうの火』である。

・抱きしめる／ゆめみるように玻璃窓が海のそびらをしんと映せり
 ・舟を漕ぐしぐさは羽ばたきのそれに似てるね ころろ透きとおるのね

・白昼夢 ゆれるたましい 海だから風だから憎まれないとでも
 ガラスが映し、またガラスに「抱きしめ」られる海。舟を漕ぐしぐさと羽ばたきが比較されるときには、空と海が一瞬等しいものとなり、心だけでなくその空と海も透きとおる。こうした水は、現実の質量を持たない、ほとんど抽象概念としての水である。高度な絵画性を帯びた経塚作品と比べると、その差はいっそう際立つ。三首目は、文脈や作者の背景から考えると、東日本大震災のことを言っているのだろうと思われるのだが（井上は福島県いわき市出身）、生々しい記憶や傷跡を詠うのではなく、あくまでも淡く「白昼夢」として描かれている。この歌集には三人称的な「私」のリアルな描写は存在しない。あるのは、すぐれたストーリーテラーとしての井上法子のありようだろう。作者の影がないとき、一人称的なまなざしの開示は作者の手を離れて物語に転じうるのだ。水という身近な素材にも、短歌が宿命的にもつ「私」の問題がひそんでいることを、この二つの歌集は教えてくれる。